

グローバルという困難な時代に

全学共通カリキュラム運営センタードイツ語教育研究室主任／
異文化コミュニケーション学部教授 新野 守広

「グローバル教養副専攻」がスタートした。テーマの一つである「German Language & Culture」の一端を構成する講義科目「ドイツ語圏の社会」を担当しているが、ここ数年の世界の激変に途方に暮れることも多い。

1989年のベルリンの壁崩壊は、当時西ベルリンに住んでいたこともあり、自分の言葉で講義のできるテーマである。東西ドイツの社会制度の違いや市民同士の感情の行き違い、人々が抱いた再統一への希望とその後の幻滅など、実際に見聞きしたことを交えて語っていると、当時のことをまるで昨日のこのように思い出す。しかし、懐かしんばかりはいられない。

いったいあの頃、英国がEU脱退に向けて舵を切ることになるなどと、誰に想像できただろう。ヨーロッパ各国で極右と称される反EU・反移民の政治勢力がこれほど台頭することになるとは、誰に予想できただろう。1990年代のドイツは不況が続き、特に東ドイツ出身者や移民にとって生活は厳しく、決して明るい社会ではなかった。けれども個人的に出会う機会があった多くの人々は心の奥底では未来への希望を抱き、再び東西冷戦期のような敵対と憎悪の時代に戻ろうなどと考える者はいなかった。

当時、東と西が再び一つになれたのは、EUという国家を超えた共同体が存在していたからだという理解が広くあったと思う。その後、ユーロが導入されたEUをギリシャ債務に端を発するユーロ危機とリーマンショックが襲ったが、輸出産業が主であるドイツはユーロ安を生かしていち早く立ち直った反面、人々はEUを重荷と思うようになった。2015年夏の難民・移民申請希望者の大量流入がEUへの疑念を決定的にした。

2018年10月に彩の国さいたま芸術劇場で『第三世代』というパレスチナ／イスラエル／ドイツの複雑な問題を扱うベルリン・シャウピューネ劇場の舞台の拙訳による翻訳上演があった。作者はイスラエル出身で、現在ベルリンで活躍するヤエル・ロネンである。同年12月には東京芸術劇場地下のギャラリーで、彼女が旧ユーゴスラビア出身でドイツ在住の俳優たちと一緒に作った『コモン・グラウンド』という舞台の日本語によるリーディングもあった。

世界各地で紛争に苦しむ人々の声は、演劇や文学、映画などを通じて届けることができる。大学での講義も、ただ単に状況を解説するばかりでなく、そこに生きる人々の姿を伝えられないだろうか、と悪戦苦闘する毎日だ。新たにスタートした「グローバル教養副専攻」が、「グローバル」という困難な時代を学生とともに見据える場になればと思う。